（『近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター』14　2002.12.7）

言語学者奥田靖雄氏の満州時代について

花　薗　　悟

ここでは現在筆者が関心をもっている言語学者奥田靖雄氏について簡単に紹介したい。奥田氏を紹介しようと思うのは、氏の言語学の研究には青年時代の満洲体験がなんらかの影響を与えているのではないかと考えるからである。

奥田靖雄（本名：布村政雄）氏は 1919 年富山生まれ（2002 年没）、モーガン学者として著名な布村一夫氏[注1]の実弟である。 十代の頃、満鉄調査部に就職していた布村一夫氏を頼って満州へ渡り、新京商業、ハルビン学院を経て建国大学の助手（民族学）に就任。民族学を研究していた満州時代には、『書香』（満鉄大連図書館）に民族学関係の論文・翻訳を数篇執筆している。布村一夫氏は石堂清倫氏の満鉄調査部における同僚で、その関係で奥田氏は石堂氏とも面識があったようだ[注2]。

満州里近辺で国民学校の教師をしていた終戦の直前、ソ連参戦の報を聞いて命からがらハルビンまで戻り、二年ほどさらに満州に留まった後に帰国。日本へ帰ってからは闇屋を生活の糧としながら言語学の研究を開始し、1950 年民主主義科学者協会（通称「民科」、当時の進歩的な科学者の団体）の言語部会に参加、次第に言語部会のリーダー的存在になり、'56 年の民科解体後は「言語学研究会」を組織、ソヴィエトの言語学に学びながら研究を続け、大学に属さない在野の研究会のリーダーとしての活動を長く続けた（ということは五十代で大学に職を得るまで「失業者」だったということになる。それ以後も病に倒れる 2001 年春まで研究会の活動を中心になって続けていた）。

また国語教育にも積極的にかかわり、やはり 1956 年に児童文学者・教育実践家の国分一太郎氏らと教育科学研究会国語部会を結成[注3]、日教組の助言者としての活動のほか、60 年代から 70 年代にかけて広く全国の小学校で使われた国語科用テキスト『にっぽんご』シリーズ[注4]の編集・執筆も中心的に行っている。

1971 年、宮城教育大学教授に就任（1984 年停年退官、2000 年名誉教授）。1993 年には大阪大学から文学博士号を授与された。

奥田氏の業績は現代日本語の文法記述およびその方法論が中心であるといえる。いまでこそ現代日本語の研究は市民権を得ているが、古代語の研究が中心の国語学界において、現代日本語を主な対象とする奥田氏らの研究は長

い間、正当な評価を受けることはなかった。また国語学と別の流れの言語学的な日本語研究においても、生成文法など「アメリカ直輸入」の言語学が大きな力をもっていた時代には、「現象の単なる記述は科学ではない」とされる風潮が（少なくとも一部には）あり、奥田氏とそのグループ（前述した言語学研究会)の行っていた記述的研究はあまり認知されていなかった。しかし、'70 年代から徐々に評価されはじめ、特に'80 年代以降の日本語教育の興隆とともに、厳密な記述を旨とする姿勢がようやく正当な評価を受けるようになり、93 年の博士号授与にもつながることとなる。

実際、格（たとえば名詞と動詞との意味的な関係）の記述、アスペクト、モダリティ、複文など、('70 年代以降の）日本語文法の研究にはその時々のブームがあったが、言語学研究会の研究の進展とそれぞれの分野の研究の興隆はほぼ平行していると見ることができる。この点で、直接間接に奥田氏の影響抜きには戦後の日本語学、特に文法論は語れないと言っても過言ではないだろう。

さて、奥田氏の日本語研究の方法には他の研究者にはない特徴があった。伝統的な意味での単語の概念の欠如した（文部省検定の）学校文法・近代言語学に対し、単語を言語の基本的な単位と見る「ヨーロッパの伝統的な言語学」の姿勢を受け継いで貫きとおしてきたことがまずひとつ。また、それまでの現代日本語の文法研究では内省（自分の頭で作り出した文の適不適をもとに文法現象を考察すること）による研究が中心で、奥田氏らのようにデータを徹底的に集めて考察する研究は少なかった。奥田氏らの姿勢は当時のロシア＝ソヴィエトの言語学の研究の特徴でもあり[注5]、英語一辺倒の戦後の言語学界とは一線を画すものであった。

このような奥田氏の研究には、満洲時代の経験が大きく影を落としていると考えられる。ロシア語学に親しんでいたということにしても、ハルビン学院でのロシア語の習得が先行しているし、さまざまな民族が交錯する哈爾濱での経験や戦中のツングース民族誌の研究（満州里近辺での国民学校教師はそのフィールドワークであるともいえる）が母語を見つめ直すきっかけになったことはもちろん、それらの土地でのさまざまな体験がもっと深い意味での氏の学問の原点となり、戦後在野にあって精力的な研究をおこなっていく原動力になったとも考えられる。このような理由から、筆者は奥田氏の満洲体験を調査していくことが氏の言語学の理解を一助となるのではないだろうかと考える[注6]。また、それは満洲に滞在した体験をもつ知識人の満州体験の意義を考える上でも重要なのではないかと思えるのである。

注

(1) 満鉄大連図書館勤務、『満鉄調査報告』にいくつかの論考、翻訳あり。

(2) たとえば、石堂清倫氏の「布村一夫とその弟夫妻と何かの用で（ハルビンの：花薗注）町を歩いていると、人相のよくない兵士にとりかこまれ、若夫婦は結婚記念の指輪や時計をとりあげられた」(『わが異端の昭和史（上)』平凡社ライブラリー版：341）という記述にある「布村一夫の弟」は奥田氏のことで、終戦直後には既にハルビンまで帰ってきていたことがわかる。なお布村一夫氏については同書の随所に記述がある。

(3) 糸井通浩・植山俊宏編『国語教育を学ぶ人のために』（世界思想社）に「教育科学研究会」の項目あり。

(4) 無着成恭氏ら明星学園の教師グループとの共同編集。

(5) ただしロシア語の研究をただ日本語にあてはめたのではなく、単語を言語の基本的な単位とする自分たちの考える言語学が実践されているのをロシア言語学に発見し、それを批判的に摂取した、ということである。もちろん、戦前の近現代日本語研究（傍流ではあったが)の流れや構造主義言語学など他の言語学からも多くを学んでいることはいうまでもない。

(6) もちろん、氏の学問が第一に論文の中にあるのはいうまでもない。奥田氏の足跡を週刊誌的に辿るだけで氏が理解できるわけでもない。奥田氏の書かれたものを徹底的に読み、研究史的な流れに位置付けることが必要だし、それには奥田氏の膨大な蔵書（大部分がロシア語文献とのこと)の調査などを言語学史の研究と平行して進めなければならない。ただし、人物を知ることが書いたものの理解を深めるということは往々にしてあるものだし（たとえば服部四郎 1960『言語学の方法』岩波書店：583)、そのためにも関係者の聞き取りなどに関しては急がなければならない。

（はなぞの　さとる：東京外国語大学留学生日本語教育センター講師）